最優秀賞（小学校５・６年生の部）

まちがいは怖くない
（課題図書：クルミ先生とまちがえたくないわたし藤島クリニック再生計画）
【感想文】

小美玉市立小川南小学校　６年 山口　心愛

「私のためだけにつくられた本なのかな。」
本を読みながら何度も自問自答をくり返した。それは、まちがいたくないという気持ちと理由がすべて一致していたから。
私はまちがうことがきらい。授業中、勇気を出して発表しても、「ちがいます。」と言われたらほおが熱されたように熱くなる。それに、周りの友達に勉強ができないと思われ、自分が下に見られるのがいやだから。それでいつも自分から挑戦することをさけてきた。基季も同じような気持ちだったのだろう。正しい行いをすれば、不快な気持ちになる人はいないし、自分がなにより楽だから。
基季はクルミ先生が経営する藤島クリニックを人気にするため、チラシやポスターを作成する。が、クルミ先生に「てんでダメ」と言われ落ちこんでしまう。クルミ先生を思ってのことなのに、本人に一ミリも認められず、頭ごなしに否定されたら、私も落ちこむし、立ち直れないかもしれない。その後クルミ先生と関わらないように生活する。もう、まちがいに巻きこまれたくないからだ。でも基季は、基季が行動したことを「正解」と認められるまでクルミ先生にうったえ続けた。やっと認められたとき、基季の「ぜったいにまちがえてはいけない」という気持ちはうすれ、まちがいを恐れずに挑戦するように成長した。
まちがえないことをするには、誰もが正しいと思うことを考えて行動しなければならない。だから、自分の気持ちを無視しなければならない。そのせいで、やりたかったことができないと不満が残り、後悔をする。それでも外面だけは優しく、思いやりのある完ぺきな人に見せるために我慢していた。
また、新しいことに挑戦しようとすると、心の虫に（まちがえたらどうするの。ばかにされるかもしれないよ。）と語られる。その結果、いつも挑戦することができなかった。でも、勇気を出して取り組んだとき、結果が悪くても、その勇気を否定する人などいないのだろう。家族や友達も応援し、協力してくれるにちがいない。
その後の生活で、卒業式の実行委員を決めることになった。以前の私なら、大事な式での責任は背負えない、休み時間がなくなるから、と聞く耳を持たなかっただろう。でも今の私なら、よりよい式にしたいという前向きな考えがあり、実行委員に立候補した。ぶじに実行委員になれたときは、不思議と喜びしか感じられなかった。責任が大きいなどより、自分達だけの特別で心に残る式にしたい、というやる気に満ちた気持ちのほうが大きかったからだ。この時、初めて挑戦する楽しさや喜びが分かった。
私はこれからも、まちがいを恐れず挑戦し続ける。私は私なのだから、自分の個性を大切にしなければ。そうして、内面から明るく優しい人になる。「きっとできるよ。」基季がそっと声をかけてくれた。